

令和6年2月号

一宮町の歴史特集 ― 加納久朗没後60年 ―  
ワレワレハ千葉県ノタメ

千葉県八日本ノタメ 日本八世界ノタメ



【第11回 特別寄稿】

加納久朗と佐藤信淵

佐藤賢司が加納久朗知事に期待した理由に「干拓」があります。当選の前、佐藤は次のように詠んでいました。(以下、歌は『山雉子』より)

加納氏の『首都建設』を一読し

信淵翁の再来とみる

(昭和36年5月9日)

信淵とは江戸時代後期の農政学者・経世家、佐藤信淵のことです。『内洋経緯記』では、掘り割りを造成して印旛沼の水を東京湾に流し、沼を干拓して農地とし、さらに外国に東京湾の入口が封鎖された場合、物資を浦賀水道を通らずに江戸に運ぶことができるという壮大な構想を述べています。佐藤には「印旛京葉干拓の歌」と題する歌もあります。

京葉と印旛を繋ぐ大規模の

干拓めざせし佐藤信淵

(昭和37年4月16日)

佐藤はスケールの大きな発想を

持った加納知事を、まさに信淵の再来と感じたのです。

印旛沼の最奥部に位置する佐山(現八千代市)に生まれた佐藤にとつて、印旛沼干拓は悲願でした。江戸時代の三度にわたる事業はいずれも失敗していたからです。その夢を加納知事に託したのです。

しかし、知事は在任111日で逝去しました。昭和38年(1963)2月21日に佐藤は「加納久朗知事午前十一時すぎ聖路加病院において逝去」と題して詠んでいます。

大望と大志をもてる加納知事

就任百日にはかに近けり

佐藤の悲しみが伝わってきます。なお、3年後に大和田排水機場(八千代市)が完成し、沼の水を新川・花見川を通じて東京湾に放流できるようになりました。国営による干拓事業が完了したのは、昭和44年のことです。

(一宮町史編さん委員 外山信司)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

令和6年3月号

一宮町の歴史特集 ― 加納久朗没後60年 ―  
ワレワレハ千葉県ノタメ

千葉県八日本ノタメ 日本八世界ノタメ



【第12回 おわりに】

これまで9回の連載と2回の特別寄稿で加納久朗の事績を見てきました。

日本外政学会の細野軍治は久朗の追悼記事の中で「アイディアマン・加納」というより「国際人・加納」という方がピッタリするのではないかと思います」と記しています。世界を舞台に活躍し、大局的に物事を見ること

ができた久朗という存在は、当時としては異質であると同時に、人々に夢を見させてくれるような存在だったのかもしれない。

だからこそ千葉県知事に就任した際には大きな期待が寄せられたのでしよう。閉塞感がただよう世情で、久朗のやること、やることとしたことは人々にとつて新鮮かつ斬新だったのだでしょう。

昨年11月25日に開催したシンポジウム「加納久朗の描いた世界」では50人弱の参加者のもと、様々な意見・質問が飛び交いました。没後60年という比較的近年の人物である久朗の研究はまだまだ始まったばかり。とりわけ、彼の記した日本住宅公団時

代の「総裁日誌」には、非常に興味深いことが多く記されていますが、そのほとんどはまだ調べられていません。これからの研究の進展が大いに期待されます。

シンポジウムやこのコラムで少しでも久朗のことを皆さんに知っていただけたのであれば幸いです。

ちなみに皆さんは、表題下の久朗の写真が毎回変わっていたことにお気づきになりましたか？様々な久朗の「顔」から、彼の人間性を感じとっていただけだと思います。



▲加納久朗遺言状 (一宮町教育委員会所蔵)

(学芸員 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416